［別紙 2］

審 査 の 結 果 の 要 旨

氏 名　　河田 みどり

本研究は、授乳期の感染性乳腺炎において解明されていない感染経路を明らかにするために、妊産褥婦とその乳児、乳腺炎発症者を対象として、黄色ブドウ球菌を指標とした分子疫学的手法を用いて分析を行ったものであり、下記の結果を得ている。

1. 健常な妊産褥婦とその乳児から継続的に採取した検体から分離された黄色ブドウ球菌について、パルスフィールドゲル電気泳動法（PFGE）を用いた分析結果から、母親が妊娠中にメチシリン耐性黄色ブドウ球菌（methicillin-resistant *Staphylococcus aureus*[MRSA]）保菌者でなかった母子の産後に検出された MRSA 株と、研究協力施設である医療機関の乳房外来の手洗いコックから採取した MRSA 株は、遺伝的に同じ起源をもつ菌株であった。これより、病院環境に伝播している MRSA 株が母子に伝播した可能性が示された。また、メチシリン感性黄色ブドウ球菌（methicillin-sensitive *Staphylococcus aureus*[MSSA]）株の母子への伝播は、医療従事者、環境、医療従事者以外の面会人や家族が関与している可能性が示された。
2. 乳腺炎発症者から分離された黄色ブドウ球菌について、PFGE を用いた分析結果から、乳腺炎発症者から分離された MRSA 株と研究協力施設である医療機関の乳房外来の手洗いコックから分離された MRSA 株が、同じ遺伝子をもつ菌株であった。また、乳腺炎発症者 2 人から分離された MSSA 株と乳房外来の電話の受話器から分離された MSSA 株は、同じ遺伝子をもつ菌株であった。これより、感染性乳腺炎の感染経路は、医療従事者や病院環境が関与している可能性が示された。

以上、本論文は妊産褥婦とその乳児、乳腺炎発症者を対象として、黄色ブドウ球菌を指標とした分子疫学的手法を用いた分析から、授乳期の感染性乳腺炎の感染経路の可能性を示した。本研究は、授乳期乳腺炎の感染経路の解明において、初めて分子疫学的手法を用いた研究であり、独創性がありこの研究領域の基礎的研究に重要な貢献をなすと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。